

# 追補

## 1, <維新の英傑・高杉晋作の長男・東一の業績>

### ●高杉家の始まり

高杉家の祖先は、備後（広島県）高杉村で、毛利元就（約500年前）に仕えた武田小四郎春時です。したがって、以来、武田菱の家紋を使っています。系図によると小忠太（高杉晋作の父）は、武田小四郎から10代目で、毛利直参の大組士に属し、200石の中級藩士でした。小忠太は、藩政をつかさどる要職にあり、江戸在勤も長く、藩政の実務を担当した有能で実直な役人でした。

### ●長男東一の生誕

元治元年（1864）10月5日、梅之進（のち東一）が生誕。

※高杉晋作は、亡くなる前、3月29日、藩主が100石を与え、谷家を創設した。九州へ逃れたとき、谷潜蔵と変名したことに由縁します。

長男東一は、父高杉晋作が亡くなったとき、2歳半でした。高杉晋作は、父・小忠太の実直な生き方に反し、負目があったが、長男が生まれたことはなによりの親孝行で、「大不幸中の一幸」と、語っていました。

### ●高杉東一の略歴

元治元年（1864）10月5日出生（幼名：谷梅之進）

慶応3年（1867）4月14日、父：高杉晋作と死別（2歳半）

※東一は、山口城下茶白山（現：山口市白石町）に、祖父母・母とともに住みました。この家は、高杉晋作が亡くなる前、両親のために、建設

明治4年（1871）5月、7歳のとき、祖父の小忠太が、山口に来た木戸孝允に教育を託したため、東京へ出ました。その後、木戸孝允が海外へ行くため、石川小五郎（後に河瀬真孝・功山寺決起に参加）へ託されました。その後、木戸孝允が帰国。東一は、約2年間東京にいたが、東京になじまず萩へ帰りました。

※東京にいたとき木戸孝允の夫人：松子と撮影した写真が残っています。

明治10年（1877）、13歳のとき、祖父小忠太は、家族そろって東京へ移ります。東一に勉強をさせたかったのであろう、と思われます。

明治12年（1879）、東一は、15歳で商法講習所（のちの、一橋大学）へ入りました。

外人教師（ホイットニー氏）という教師は、国の御雇外国人で、2年間のうち、最初の半年は英語を習い、のち会計事務を英語の教本で習いました。したがって、英語に関しては精通していました。

※商法講習所は、森有礼が明治8年に創設していた私塾。森有礼は薩摩人、伊藤博文第

一次内閣で文部大臣。

明治15年(1882)、伊藤博文がヨーロッパ視察に行くとき、小忠太が東一を連れて行ってくれと願望。

東一はオーストリアなどへ国費で留学、しかし、伊藤より先に帰国。明治20年(1887)、名前を東一と改め、11月30日、谷家から、高杉家へ復籍。高杉東一と名乗りました。

※小忠太の娘と養子(半七郎)とが継いだ本家の高杉家は、現在も東京にあり、小忠太夫妻の墓は、東京の瑞聖寺にあります。小忠太より先代の墓は、累代墓になっていて(明治時代に小忠太が萩に設けていた)、その後、萩から東行庵清水山に移設。東一以後の墓は、二つ目の累代墓で東行庵に存在し、東一の長男・春太郎も眠っています。

※谷家は、東行庵の初代庵主：谷梅処尼、2代谷梅仙尼、3代谷玉仙尼、と引き継がれました。

明治20年(1887)、欧州に在勤(オーストリアで外交官を務める)。(伊藤博文の秘書官：矢土勝之あての書簡に本人が記述しています)

明治21年(1888)12月、『英和新国民大辞典』を出版。

明治24年(1891)7月11日、祖父小忠太が77歳で亡くなりました。(墓所は、東京瑞聖寺)

明治〇〇年、陸軍省に勤務

明治28年(1895)、東一は日清戦争の講和会議準備のため、大本営のあった広島に滞在。

明治28年、広島から、日清戦争の遼東半島へ行き、会計主任となりました。(手紙5通を出す)

明治〇〇年、遼東半島から、日本へ帰着後の記録がなく不明。

大正2年、(1913)7月11日、48歳で亡くなりました。

※東一のお墓は、東京芝区の瑞聖寺にありましたが、高杉晋作の夫人：雅子が大正11年11月5日死去したのを機会に、吉田の清水山に大正12年6月30日改葬され、累代墓となっています。

#### ●高杉東一の発刊した英和辞書

名称 『英和新国民大辞典』  
発行者 京都府平民 辻本文四郎  
専売所 辻本尚書堂  
印刷 印刷局活版科(内閣)  
価格 六円  
纂譯者 高杉東一  
版權免許 明治二十年七月七日



印刷出版 明治二十一年十二月（英和新国民大辞典）

装丁 革張 ページ数 約1,500ページ 項目数 約70,000項目 厚さ  
8.5センチ

特色 表紙が皮装丁 本文は英文横書き 和文は縦書き

#### ●英和辞書の存在を発見

『辞書風物誌』という本で紹介されています。

著者は、惣郷正明著『辞書風物誌』（昭和48年、朝日新聞社刊）。

見出しは、＜内閣印刷局「製造」の英和大辞書＞

※中見出しに「著者は高杉晋作の遺児」とあります。

本文。明治21年に出た「英和新国民大辞書」は、当時の日本の印刷、製本の最高技術水準を誇る大型洋装本です。厚さ8.5センチ、週刊誌を一まわり大きくした菊倍判、総皮装で、本の背には金文字で英文の標題を出し、その下に「印刷局製造」とあります。なぜ、内閣の印刷局で製造したかという、出版元が民間のあちこちに当たってみたが、思わしい英語の活字がそろっておらず、印刷もきれいにいきません。そこで、豊富な資材と最高の技術を持つ内閣印刷局に請願しました。

この請願が、すらすらと許されたのは、著者が倒幕の功労者、高杉東行（晋作）の遺児、高杉東一であったからです。内務大臣山縣有朋が「万物之源」という題字と自署も加え、3ページにわたって達筆をふるっています。

山縣有朋は奇兵隊総督で、晋作とは浅からぬ因縁であり、そして幕府が倒れる前年、28歳で病死した東行の遺児が英学を修めて、いま、大英和辞典を著わしました。その感慨をこめて、有朋は題字の筆をとったことでしょう。

※次の中見出しは「辞書は最良の機械」

著者の高杉東一は「字書は機械ナリ」という所論の持ち主であった。いまや世界の文化は英米二国に集っている。理化、天文、哲学、政治、経済、美術を修めるには、英学を学ばねばならぬ。東洋をあげてその気運にあるが、これを啓発する機械が完備していない。良い機械がなければ労多くして功をおさめることはできない。

その機械とは、ほかでもない英和辞書である。字数が少なかったり、訳が適切でなかったり、「完全ノ善本」がまだ世に現れていないのは遺憾である。そこで著わしたのがこの「英和新国民大辞書」であった。

発刊まで、11か月という短時間であった、とされるが、それは、不思議です。

本文1、179ページ、二段組み、英語の横組みに対して、日本語は縦組みになっています。

定価6円、(当時の小学校の先生、2、3か月分の月給額に当ります)。

January, jan'-u-à-re, s.	第一月
Janus, ja'-nus, s.	羅(向)神名
Japan, jà-pan', s.	漆(器)
—, v. a.	漆(ヲ)塗(ル) 漆(磨)ク
Japan-earth, jà-pan'-erth, s.	阿(仙)藥
Japanese, jap-an-eze', a.	日本國(日本人)
—, s.	日本人、日本語
Japanner, jà-pan'-ner, s.	漆(工) 漆(鞋)者
Japhetic, ja-fet'-ik, a.	「ア」子「シヤフエス」

(ページの一部)

山縣有朋は、高杉家に比べればはるかに下層の暮らしでしたが、それを、高杉晋作が厚くもてなし、奇兵隊のNO2にまで、引たてています。山縣有朋にとっては、大きな恩義の人。それで、山縣有朋がヨーロッパへ留学するに際し、友子夫人と暮らしていました(現在の東行庵の地にあった建物)無隣庵を、おうのさんに譲って旅立っています。おうのさんは、その無隣庵で、現在の東行庵が建設される明治17年まで暮らし、高杉晋作のお墓を守っています。

山縣有朋は、「英和新国民大辞書」を発刊した高杉東一に対し、あらためて恩義を感じ、喜んで題字を記述したものと思われます。

#### ●高杉東一は、日清戦争で遼東半島へ

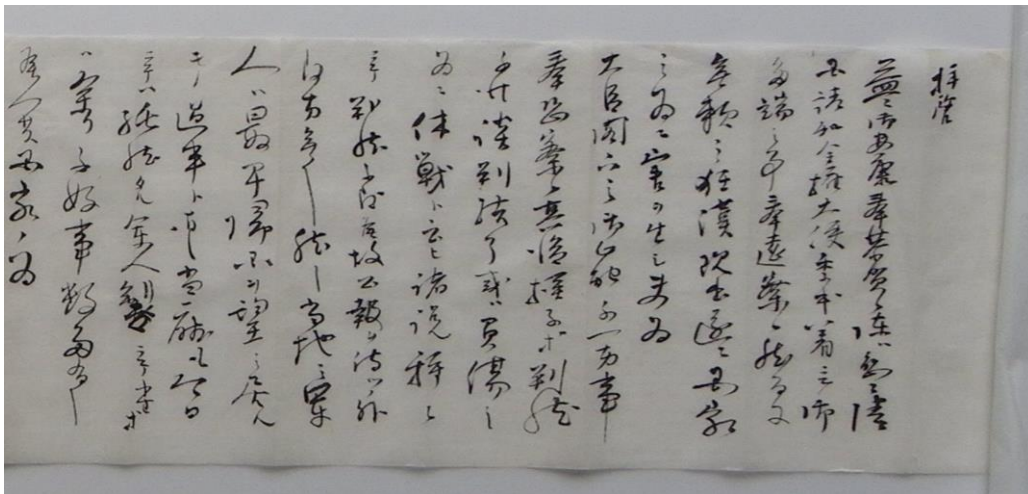
明治27年(1894)8月1日、日清戦争が始まりました。このとき、東一は陸軍省に所属し、商法講習所で会計を習っていたため、軍人として戦場で戦うのではなく、行政庁という役所の中で仕事をしました。

その時に、伊藤博文の秘書官をしていた、矢土錦山(やつちきんざん)へ出した5通の手紙が子孫の勝之氏の宅に残っていて「錦山文庫」として大切に保存されています。この5通の手紙が、松阪市立歴史民俗資料館に展示されました。その記事が毎日新聞の松阪版に掲載されていたことから、日清戦争当時の東一の様子を知ることができることになりました。

5通の手紙は、① 明治28年2月21日、② 3月9日、③ 4月5日、④ 4月27日、⑤ 5月18日付け。この間で、春帆楼で日清講和会議が開催されたのは、3月20日から始まり4月17日に調印されました。李鴻章が小山豊太郎に狙撃されたのが3月24日。伊藤博文と、秘書官の矢土錦山は下関に滞在していました。このときの条約は「下関条約」と呼ばれ、「下田条約」とともに、地名の入った条約として知られています。

手紙の内容

③ 4月5日付け 最も内容の豊かな手紙で、次の写真のように達筆で認めた手紙。



(4月5日付け手紙の前半部分)

- ・通常のあいさつに続き、1行目の下から、「清国講和全権大使李氏着にて御多端の事遠察候然るに」と、李鴻章が着き、これから多忙ですね、と、うかがっています。
  - ・4行目の上から、「無頼の狂漢出現遂に国家のために害生じそれにて」と、小山豊太郎が李鴻章を狙撃して国のためにならぬこととなった。と、言っています。
  - ・6行目は、大臣閣下の御心配一方ならず、と察しています。その後の様子など判然としないが、談判結了あるいは、負傷のために休戦と言ひ、諸説種々にて判然と致しません。と、推察。
- ⑤ 5月18日付け
- ・三国同盟の忠告で当地（遼東半島）は清国に返すことになった。一旦占領したものを返すのは残念ではあるが、台湾のみで十分である。占領するなら遼東半島より、山東省の方が良いと思う。
  - ・私は、本年中に帰朝し、陸軍省を離れることを希望している。官庁に入れない場合は、商工業社会に入るかも知れない。あるいは台湾へとなると、体が到底気候にあわないであろう。何分にも伊藤閣下へよろしくおとりなしを申し上げる。
- その後の東一の業績は、今のところ不明
- ※爵位を受けることを勧められたが、“親の七光り”、ということならば受けない、と言っています。
- 明治33年、米国ニューヨークから、伊藤博文へ手紙
- ・「伊藤博文の全集」憲政資料文書。伊藤博文関係文書、デジタル化資料。
  - ・ニューヨークから鉄道でサンフランシスコの大使館を経て、船便で日本へ送られた模様、英文の手紙？。
  - ・切り抜きが日本の伊藤博文へ送られているとのこと。
  - ・消印は、12月5日 NY V I A S a n F r a n c i s c o （不正確）
- ※この情報は、友人村田 仁さんからです。



(木戸孝允の妻松子と東一)



(高杉東一)

## 2、＜高杉東一と、母の雅子＞

東京での住所は『日本及び日本人』に、飯倉5丁目60番地。と記されています。(六本木ヒルズのあたり)

『日本及び日本人』には、母雅子の回顧録が収録されています。

※ 次からは、「日本及び日本人」からの引用。

この写真(不鮮明につき掲載ありません)は、先年東一が存命中、調度、寿一へ参っている娘が産後の保養に宅に帰ってきていましたとき、みんなをこの縁側に集めて、とったのでございます。東一もその時はもう病気にかかっていた時で写真も何となく元気がありません。自分で立ちながら、何と申しますか写真の綱を引いてとりましたので、左の手に握っている綱がそのまま写真に出ています。娘も産後の経過が面白くありません、大変ひさんでいましたので、思いなしか写真まで何となく力なさそうに写っています。写真に向かって右が東一、次が娘次が私、その次が春太郎、一番左がこれでございます。(東一氏夫人を指される)ごらんの通り、庭も家も昔のままに残っていますが、昔の楽しさは、かげにも残っていません。年々さびしさばかりですのみでございます。

政子刀自年七十二歳です。しかもその人を見れば、その容秀麗、その気生き生き、目もはっきりしていらるれば、耳も達者です。襖を隔ててその声のみを聴いていれば、若き娘のささやきを聞くような力がこもっていました。刀自は、病床の東一氏夫人に代わりて二階に往来して、東行碑除幕式の写真や東一氏の洋行中維納(オーストリア:ウイーン)でとられた写真、東行碑の碑文、東行先生令妹光子刀自の写真などをとりどりに示されながら、それからそれと、ありし昔の思い出を語られました。すべて刀自の許しを得てその場で写真師に複写せしめ、額にして鴨居にかけてあった東行先生御両親の写真までとり下して、示されました。

「かく皆様の御写真を揃えて頂いた内に、夫人のみ一人かけておられるのは、まことに心のこりであれば、…。と政子刀自の撮影を促した。

私のようなものが写真をとりまして、皆さまにお目にかけることは、東行を辱かしめるよ

うなものでございますから、なるべくお断り申したく存じます。一昨年もちょうど私が七十になりましたので、親戚などからしきりに記念に写真をほしいと申してきましたけれども、元来、写真をとることがきらいでございますから、それさえとうとう御断り申したような次第でございます。

しかし、この度は、東行の五十年祭を旧藩主公から御営みくださるといふ有難いことになり、その上、御社では東行のために記念号まで御作り下さるとの趣き、東行の名誉はこれにこしたことはございません。皆様の有難いお情けに東行もさぞ喜んでいてございましょう。かくまでの御親切に背くのは却って心ないことでございますれば、御言葉にあまへ御願いをいたしましょう。

政子刀自は8畳の客間の縁に毛布をしいて、はなやかなりんすの座布団をしつらえて、その上に座られました。普段着そのままの上に黒いひふを折りかけて、静かにレンズに向かわれました。

写真がすんで刀自は、自ら8畳の客間に招じて、玄米で引いた粉の湯を汲んで下さいました。そうして静かに東行先生が閉門されていた時の話をはじめられました。

東行はご存知のとおり乱暴者でございましたから、何ぞお上の御迷惑になる様なことをいたしたと見えて、野山屋敷へ入れられることになりました。それが、元治元年の3月ころのことであったかと、記憶しています。その後、東行の罪がかかるくなつたものと見えまして、その年の6月ころであったかと思いますが、野山屋敷から出されることになりまして、父の家へ帰って参りました。宅にいましてもお咎め中のこととございましたから、奥座敷の2間を閉切つて、その中に東行を入れました。外から、すっかり釘付けにしてしまひまして、それに鍵を下して誰も面会することが出来ないようにされました。

家内の者も容易に出入りすることはできません。御屋敷から家来が一人来ていまして、それがすべて東行の始末をしていまして。三度三度のご飯なども私が運んでいまして。同じお咎め中ではございましたけれども、宅にいますと、何かと自由がきくようになりました。

その内、井上さんが洋行から帰つてこられ、わざわざ宅へ尋ねてこられまして、是非、東行に会わしてくれろと申して、来られました。その由を父へ申しますと父は、ご存じの通りの頑固一箇の性質でございましたから、御屋敷の命令を固く守りまして、お咎め中のものであるから決してお会はせすることは出来ないと申しました。井上さんは是非東行に会つて西洋の様子や、これからの方針を話し度いから是非会わしてくれろと、何と申してもきかれませんか、とうとう父も我を折りまして、お会わせすることになり、私が高杉の居間へご案内申し上げました。東行も井上さんが来られたというので、大変喜んでいまして。

井上さんから、その時、いろんな話があつたと見えまして、東行もあとで様子がわかつて、愉快じゃと喜んでいまして。何しろ一切人に会わなかつたものですから、井上さんにお会いしたのは、この上もない喜びであつたらうと思われまふ。

その内、外国の船がどんどん姫島へ集まってくるという噂が騒がしくなって、国中がいよいよやかましくなっていました。それをどうしてか、東行が耳にはさみましましたと見えて、それから、居間のすぐ隣に土間のたたきがありました処へ、家来に大きな石を運ばせまして、毎日のようにその石を差し上げては下し、差し上げては下していました。なんのつもりでございましたか、私共には少しもわかりませんでした。東行の考えでは長い間一室に閉じ込められていて、自由に運動ができなかったのも、力が失せてしまっていたものですから、外国の軍艦でも打ち払うのに、こんなことではだめだと思って、あんな力だめしをしていたものと、思われます。

それから間もなく御許しが出て、馬関へ出ることになりました。馬関では例の殿様から拝領いたしました、鎧直垂を着て今の言葉では何と申しますか、外国の船との講和談判に参ることになりました。なんでもその時は、高杉という名前ではいけないということでありまして、宍戸刑馬とか変名をして参りましたように、記憶しています。

私は高杉といっしょにいましたのは、ほんのわずかの間で、その間、東行はいつも外ばかり出ていました上に、亡くなりましたのが未だ29歳というほんの書生のときでございましたから、私は何にも東行について、お話す記憶がございません。その内、馬関で東行が病気にかかりまして、だいぶひどいという知らせが参りましたので、私は両親と一緒に馬関に参りました。

東行は、馬関の新地の林屋という家の奥座敷に寝ていました。林屋と申しますのは、唯今で言えば、新地の村長さんとでも申します家でございます。東行の病気は唯今の肺炎とでも申すような病気でございまして、私共が参りました時は、もうだいぶ悪くなった時で、たくさん吐血をいたしました。ご飯もおもゆ位しかいただけませんので、もうすっかり弱っていました。

井上さんや福田さんなどがよく御尋ねくださって、お話をしてくださいました。東行は自分の体は悪くなるし、それにひきかえ、世間はいよいよ騒がしくなるので日に日に興奮するばかりでいつもいらいらしていました。井上さんや福田さんに向かっていつも『ここまでやったのだからこれからが大事じゃ。しっかりやってくれろ。しっかりやってくれろ。』と言い続けて亡くなりました。いいえ家族のものには別に遺言というものはありませんでした。『しっかりやってくれろ』というのが遺言といえは遺言でございましょう。

野村望東尼さんは、一緒に林屋に来て下しまして、東行が亡くなるまで、それはそれはひと通りならぬお世話をして下さいました。それで東行が亡くなりましてから東行のかたみの品を望東さんへ御贈りいたしました。それは何でございましたかもう忘れましたが、何でも東行の衣類であったかと思えます。その時望東さんは三田尻にいられましたがその地から大変ご丁寧なおあいさつ状をいただきました。その手紙は今も私の文箱に保存しています。望東さんは、ご存知のとおり大変御手のいい方でご覧のとおりこの手紙なども却却達筆でござ



います。歌も大変御上手であり其の外生花縫取りなども却却御上手で何でもよく出来たかた  
でございました。

東行が亡くなりました時に、歌を書いた短冊を下さって、これを是非東行の柩の中に入れて  
一緒に葬ってくれろと頼まれましたが、これはとうとう私が手ばなし兼て今に保存いたし  
ています。

その歌は、

おくつきのもとにわがみはとどまれど

わかれていぬる君をしぞおもう 望 東

お歌も却却よく出来ていますが、この歌を拝見しますと、昔のことが昨日のように思われま  
す。

東行は平生天満宮様と観世音様を大変信仰していましたから、望東さんが、東行の生前に  
観音経を写していただきましたことがあります。それは、『妙法蓮華経観世音菩薩普門品第二  
十五』といふので二寸に四寸位の薄葉紙に書かれたもので三十六枚あるのを綴ったものであ  
ります。その裏に

ふでのうみ硯の海もちかなから

えも踏みなれぬ鳥のあとこれ 望 東

と書き添えてあります。望東さんのやさしい心掛けがこの歌の中にも見えているように思わ  
れます。その裏に東行がいたずら書をしています。それはなんのつもりでございませうか何か  
ら見たのですか次の様な歌を書いています。

尾張美濃の国境にて人をやく煙を見て

よみ人しらず

あれを見よ我もあの身に成海坂

明日とも知れぬ身のをわりかな

それを聞いて

あすあすと思う心はあだ桜

よいに嵐のふかん物かや

また前の人

あすあすと兼て心に思へ共

明日明日とは思はざりけり

と書いています。何か自分で思いついて書きつけて置いたものでありましようが、今日にな  
ってみますれば、なんとなく自分のことを自然に知っていた事のように思われます。東行が  
亡くなりました後に、望東さんがこの経文のことを思い出されまして、次のようなお歌をく  
ださいました。

のりのみち君先かくろふみとしも

しらでかたみにやりしかなしさ 望 東

望東さんはお歌がお上手でいらっしやいましたから、お歌を拝見していると、なんとなく昔  
にさそはれて行くような心地がいたします。これは東行に関したものではございませぬが、

望東さんのお短冊を東行がもっていましたのに

さわがしき世にもならはで秋の野の

花のすがたみなのだかなり 望 東

というのがございます。

東行が持っていました短冊の中に、あなたの国の平野国臣先生のがございます。それはこれでございます。

玉敷のたいらの宮路たえまなく

みつぎのくるまはこぶよもかな 国 臣

下田歌子さんが先年東行の十七年祭の折に書いてくださいました短冊は天の橋立の杉板でございすが、お歌は、

国の為つくすするしは頭はれて

いさほくちせぬ谷のあや杉 下田歌子

東行が剃髪をいたしました折の歌に

西へ行く人をしたひて東行く

わがころをば神やするらん 東 行

といふのがございますが、偶然にも父が西行法師を詠じました歌がございます。それは、

世をうしとすてしうちにもすてやらぬ

しきたつ澤の秋の言の葉 丹 治

と申すのでございます。

私は久しく国へまいりませぬ。先年東行碑の除幕式がございました時に、是非にと勧められましたけれども、丁度その折は、孫がなくなりまして葬式を出すという騒ぎの時でございますので、つい失礼いたしました。この月末、春太郎の試験休みを利用いたしまして、一家打つれて、久しぶりでお国へ墓参を致したいと存じています。

### 3、＜明治維新150年：源流の一滴＞

「東行」の真意は…

“西へ行く 人を慕いて東行く

わが心をは 神や知るらん

高杉晋作は、文久3年（1863）3月15日、歌人の西行法師を慕って、上の句を詠んでいます。

このとき、高杉晋作は頭を剃髪し、10か年の暇を藩から許してもらい、自ら、はじめて「東

行」と名乗っています。

なぜ、このときだったのでしょうか。

高杉晋作は、かねてから、吉田松陰の教え「人事を極めんと欲せば、まず地理を見よ」の言葉に惹かれていました。

それも、師の吉田松陰が海外渡航を熱望していたにもかかわらず、実現することができなかったことを知っていたことから、自分はぜひとも、と、望んでいました。

## 上海へ渡航

ところが、文久2年(1862)5月から2か月、中国(清国)の上海へ思いがけなくも、渡海するチャンスがめぐってきました。このときの心境を、日記のなかに「心中喜悅思ふべし」と記し、大喜びしています。

伊藤博文など“長州ファイブ”が、イギリスへ渡海する前年のことで、名だたる長州人のなかでも、真っ先に海外を見たことになりました。

ヨーロッパの軍事力をはじめ生活文化に接したわけです。

その上海への渡航は、長州藩からではなく、幕府の船が上海へ行くことになり、同行を許されたのでした。

幕府の目的は、表向き外交使節の派遣でしたが、交易が真の目的で、石炭(25万斤:150トン)人参(5千斤:3トン)、煎海鼠、乾鮑、昆布や塗り物を積んでいました。

メンバーは、幕府の役人とその従者、下僕を含め全員で51人のほか、英国人の船長や15人の船員が全てでした。

高杉晋作など幕府役人のほかのメンバーは、従者という資格での乗船で、このとき薩摩藩から五代友厚、佐賀藩から中牟田倉之助が乗っていました。

この上海渡航こそ、高杉晋作のその後の人生を決定づけるもので、特筆にあまりあることでした。

当時の上海は、イギリスとのアヘン戦争が終わって、すでに20年が経っていました。

幕府の船は、イギリスの商人ヘンリー・リチャードソンから3万両(約20億円)で購入した「千歳丸」という帆船でした。

高杉晋作が見た上海は、シナ第一の港で、ヨーロッパの商船・軍船が数千隻も停泊し、マストが林立し港を埋めていました。

陸上は、諸国の商館が建ち並び城閣のごとし、その廣大厳烈なること、筆舌にあらわせない、とあります。

上海はイギリスとのアヘン戦争に敗北し、1842年に開港し、以降フランスやアメリカなどの貿易攻勢にさらされていました。その光景を現地で見ることになりました。

当時の上海は、半植民地となっていて、イギリス人・フランス人・アメリカ人が街を歩くと、清国人は、みんな避けて、道を譲っていました。

さらに、上海の川(黄浦江:こうほこう)にかかる橋「外白渡橋」(ガーデンブリッジ)を

渡るとき、外国人は無料で、清国人は有料（1銭）でした。

その理由は、橋の架け替え費用を、外国人に出してもらったためです。

高杉晋作は、驚嘆のまなざしで街を歩き、「皇清全図」を、アメリカ人商店では七穴銃を購入とも記しています。

※ピストルは2丁購入し、坂本竜馬に1丁譲ったことは、よく知られています。

また、宿泊先で、英語の本を読む、と英語を学んだことも記しています。

2か月の上海体験から、日本を上海のようにしてはいけない、と強く感じ、そして、大砲を積載した軍艦や小銃で装備した軍人の姿を見て、日本の軍事力で、海外に打ち勝つことの不可能をいち早く知りました。

結果として、洋式軍備の一刻も早い装備を進めること、上海のように外国の植民地になってはいけないことを、感じたことが後の高杉晋作の行動指針となりました。

### 江戸幕府を倒すため東へ行く

上海での経験は、現在の日本の軍事力で、西洋に打ち勝つことの不可能を知ることになりました。では、どのような行動を起こしたらよいか、を考えました。

それは、一刻も早く江戸幕府を倒し、西洋に並ぶ日本を創ろう、というのが結論でした。

江戸幕府は、本州の最西端長州藩から見れば、位置的に東にあって、東へ攻めて行くことになります。

高杉晋作は、上海の体験から、江戸幕府を倒すために東へ行く、と胸の内に深く刻み、その思いを「神のみが知る」と、言ったのです。

“神ぞ知るらん”は、この胸の内の熱い思い、そのものでした。

長崎に帰ってからの行動は、藩に相談もなく、独断で、2万両の蒸気船購入契約をしたことです。しかし、藩が認めてくれるはずもなく、契約は成立しませんでした。

その後、8月23日、京都で藩主に中国・上海での情勢を報告しています。そして、江戸で亡命を図りました。

亡命を図ったとき、父親に「私儀この度国事切迫につき、余儀なく亡命仕り候。御両人様へ御孝行仕り得ざる段、幾重にも恐れ入り奉り候」と書面に記しています。

亡命は、藩を脱出し、浪人になることで、藩と家族とのきずなを断ち切ることであり、大罪でした。

しかし、このとき、周布政之助と桂小五郎のとりなしで、何の処罰も受けず、藩邸の業務にもどりました。

ところが、12月12日、同士13人とともに、江戸・品川に新築中の英国公使館を焼き討ちする事件も起こしています。そして次の年、3月1日、江戸を発って帰国の途に着きました。京都まで帰り、周布政之助に会って「一刻も早く、倒幕の戦いを起こすように」と訴えると、返事は「10年間先のことだ」とのことでした。

すると、高杉晋作は3月15日、「10年間の暇」を、と願い出て許され、早速、剃髪・出

家し「東行」と号しました。

この時に詠んだのが、  
“西へ行く 人を慕いて東行く  
わが心をば 神や知るらん  
です。

3月30日、京都を発し、4月10日、萩に帰着。約2か月間、萩の松本村で閑居していました。

ところが、事態は急変し、6月3日、藩主が亡命の罪を許し、次の4日、山口の藩庁に呼び出し「馬関防御」を命じたのです。

高杉晋作は、こうして、下関で「奇兵隊」の結成となります。

外白渡橋：上海（撮影：安富静夫）



上海市街（撮影：安富静夫）



号「東行」を実行へ

上海を見たことによって、戦をしても外国に勝つことはできない、と知っていた高杉晋作ではありますが、藩主の命であるからには、関門海峡へ登場しなければなりませんでした。

いよいよ、関門海峡を舞台に、高杉晋作（東行）が、活躍する場面となります。

イギリス・フランス・オランダ・アメリカの四か国、17隻の連合艦隊に襲撃された長州藩は、当然にして大敗。海峡に臨んだすべての人が、西洋に勝つことの不可能を知る戦いとなりました

東へ行き、早急に江戸幕府を倒し、新しい国をつくらなければと、目標が定まったのです。

やがて、高杉東行は、長府功山寺で挙兵することになります。

そのとき、死を覚悟し、「焦心録に題す」という漢詩に、燃える心を表現。死を覚悟し、墓誌銘まで記しての覚悟でした。

「焦心録に題す」

内憂外患迫吾州

内憂外患我州に迫る

正是邦家存亡秋

正にこれ邦家存亡の秋（とき）

将立回天回運策

まさに回天回運の策を立てんとす

捨親捨子亦何悲

親を捨て子を捨つるまた何ぞ悲しまん

※「墓誌銘」碑は、東行庵だより104号を参照されたい

その覚悟に、共に行動したのが、後の伊藤博文でした。以後、大田絵堂の戦いで勝利し、それまで、藩論が統一されていなかったのを「倒幕へ」と導くことができました。いよいよ、東への道筋ができ、行動を起こしたのでした。この時点こそ、明治維新150年の胎動でした。

終焉、近くなる

江戸幕府からすると、このような急進的な長州藩を倒すことは、即刻の命題。長州藩の四つの境界にせまって来ました。

当然、関門海峡の対岸、小倉藩もその先頭に立って来ます。その日が、慶応2年（1866）7月18日と情報を得ると、長州藩を率いる高杉東行は、その前日17日に海峡から小倉藩攻撃を開始しました。

ところが、7月22日、高杉東行は吐血して、結核を発病してしまいました。秋になって、病状は悪化し、戦の勝利は間違いないものの、自分の病との闘いは、予断を許さないことになってしまいました。

治療をせざるを得なくなって、桜山招魂社の近くに住むことになりました。その場所を、自ら「東行庵」と称し、重体となって林算九郎宅の離れへ移るまでの数か月を過ごしました。したがって、吉田の東行庵は、2代目の名称なのです。

こうして、慶応3年（1867）4月14日、高杉東行は、東へ行く との思いは、奇兵隊士に託し、逝去してしまいました。

しかしながら、この「東へ行く」の思いは、明治維新150年の流れの発する源流、その最初の一滴であったことは、東行庵にかかわる人々全員の誇りです。「東行」の意味を深めていただき、「東行庵」を味わってください。

初代東行庵（桜山町）



東行墓



## 4、＜幕末・激動の関門海峡＞

### ■吉田松陰の残したもの■

#### ●次代を担う人材を育成

吉田松陰の父・杉百合之助は、礼に厚く、勤儉の読書家で、「話す暇があるなら本を読め」と、常々教育をしました。

吉田松陰は、『士規七則』で、「志を立てて、もって、万事の源となす。書を読み、もって、聖賢の教えを考える」と、読書を勧め、野山獄にいた1年2ヶ月の間に、618冊を読んでいます。「吉田松陰全集七巻」

「学者になってはいけない。人は実行が第一だ」と言い、書を読み感ずるところは、抄録しておくべし」とも、言っています。

松下村塾の聯には、「自非読萬卷書 寧得為千秋人」と記されている。

※（万巻の書を読むに非らざるよりは、いづくんぞ千秋の人たるを得ん）と読みます。

#### ●吉田松陰の遺書「留魂録」

2通作成しています。（処刑前日のたそがれに、書き上げ）

遺書「留魂録」を2通の理由は、見つかって、取り上げられてはいけないためです。

- ① 1通は、遺品一括の中で、江戸にいた門下生飯田正伯へ渡りました。（その後、行方不明）
- ② 別の1通は、沼崎吉五郎（牢名主）へ。彼は三宅島へ流罪となり、刑期を終えて明治7年、東京へ戻りました。明治9年（1876）、野村靖（神奈川県権令）へ渡しました。17年振りのことでした。以後、萩松陰神社へわたされ、現在、博物館「至誠館」に展示されています。

大切な文言は

「天下の事を成すは天下有志の士と志を通じるに非ざれば得ず」

天下の事をするには、志を同じくする人で、結ばれていなければならない。

※ のちに、高杉晋作は、奇兵隊を結成するとき、「有志の士」といって、身分の差別なく、志のある者であれば、身分は関係ない、集まれ、としました。これは、全く新しい考え方でした。

### ■高杉晋作の活躍の舞台：下関■

#### ●松下村塾、上海で情報収集を学ぶ

松下村塾には、「飛耳長目」というノートがあり、情報収集を目的にしたものでした。

高杉晋作：上海を見ました。

※高杉晋作は、文久2年(1862)5月～7月にかけて上海へ。(アメリカ・フランスに租借された、みじめな清国<現在の中国>の様子を視察)(外国の近代化された軍備を見て驚き、ピストル2挺、ハンドバッグなどを、おみやげに買っています)

※外国の軍隊に立ち向かっても勝てないことを悟り

※洋式軍備を整えなければならないことを痛感します

### ●関門海峡を行く外国船を撃つ

幕府、文久3年(1863)5月10日をもって、攘夷決行としました。

第一次攘夷戦で、アメリカ商船ペンブローック号を攻撃。(5月10日)

第二次攘夷戦で、フランス報知艦キャンシャン号を攻撃。(5月23日)

第三次攘夷戦で、オランダ軍艦メジュサ号を攻撃。(5月26日)

第四次攘夷戦で、アメリカ軍艦ワイオミング号を攻撃。逆に敗れました。(6月1日)

第五次攘夷戦で、フランス軍艦セミラミス・タンクレード号を攻撃。逆に上陸され前田砲台を占領されました。(6月5日)関門海峡に危機到来。

### ●高杉晋作・下関へ登場「奇兵隊」を創設

高杉晋作は、白石正一郎宅に来ました。文久3年(1863)年6月6日のことです。

白石正一郎宅で「奇兵隊」を結成。(6月7日)

※“有志の士、集まれ”(これまでの軍隊は、武士によって編成されていました。奇兵隊は、「志」のある者ならば、士農工商という身分に関係なく、入隊することができました。これは、それまでの身分社会を崩壊させるもので、大きな意味をもつものでした。人はみんな平等、という考え方が、形になって現れたもので、高杉晋作の大きな功績の一つです。

### ■討幕へ向けて■

元治1年(1864)年8月5日。四国(イギリス・オランダ・フランス・アメリカ)の連合艦隊が来襲。前田に上陸して占領。長州藩は大敗北。

(イギリス=9隻、オランダ=4隻、フランス=3隻、アメリカ=1隻 合計17隻)

※高杉晋作、講和全権大使として交渉にあたり、和議成立。彦島の租借を拒否。300万ドルの賠償金(遠征の全経費プラス下関の街を焼かなかった償金)を幕府に払わせることにしました。

300万ドルの分配=フランス・オランダ・アメリカ=785,000ドル

イギリス=645,000ドル

(140,000ドル少ない:前の年に襲撃なし)

※慶應1年(1865)支払い開始、明治7年終了。

※アメリカは、明治16年に日本へ全額を返還。(法外な数字であったため)

※彦島を、租借から守る。(租借を許していたら、香港のようになっていたであろう、と推察される)

### ●藩論を”倒幕へ統一”するため、長府功山寺で挙兵

高杉晋作、元治1年(1864)12月15日 “回天回運の策”をたて、俗論派討伐のため長府功山寺で挙兵、わずかに伊藤博文など80人ほどが従って出発しました。

※このとき、高杉晋作は、死を覚悟しての挙兵でしたが、国のためであれば、父や母、子を捨てることになっても、なんら悲しいことではない、と詩を詠んでいます。

※大田絵堂の戦いが、慶應1年(1865)1月6日に始まり、俗論派を破って、長州藩が、倒幕へと意志を統一させました。

(それまで、長州藩には、急進派と保守派がありましたが、急進派が勝利して藩論が統一されました)



## ●日本最初の招魂社創建

慶應1年（1865）8月6日、高杉晋作の発案で、桜山招魂場を創設。日本で最初の招魂場。現在桜山神社の391柱の霊標すべてが、同じ形をしています。身分の差別がない、という証です。

その後、全国各地に招魂場ができ、東京招魂社は現在の靖国神社です。

「弔むらわる人に入るべき身なりしに、弔むらう人となるぞはづかし」

※高杉晋作は、奇兵隊に入隊してきた人が、自分よりも先に亡くなったことに対して心を痛め、弔ったのです。

## ●四境戦争に勝利す

第二次幕長戦争が始まり、大島口では、慶応2年（1866）年6月7日、高杉晋作、がオテント丸（丙寅丸）で出撃し、勝利しました。

※小倉口の戦いでは、6月17日、関門海峡で戦いが始まりました。（坂本竜馬も高杉晋作を支援：7月27日に赤坂で激戦。8月1日、幕府軍総指揮小笠原長行逃走（徳川家茂死去）、小倉城自焼。長州藩が勝利しました。このとき小倉藩の藩校（思永館）から、書籍を持ち帰り、奇兵隊の所蔵本として学びました。

※小倉藩20,000人に対し、奇兵隊など1,000人で勝利しました。その勝因は、長州藩が、早くから洋式軍備を整えていました。それは、坂本龍馬の尽力で、薩摩藩の名義で購入していたことによります。そして有事に備えた資金があったのです。

## ●長州藩の経済力は？（撫育方・越荷方役所が万一に備え、お金を蓄えていました）

下関港は、北前船の中継港で、出入りする船の荷物を預かって保管料を取ったり、担保にして金を貸したり、委託販売を行ったりと、金融業を行い収益をあげていました。その収益は、万一に備えて蓄えられ、幕末になって洋式軍備の資金にあてられました。

## ■奇兵隊と読書■

### ●小倉藩の藩校・思永館から、戦利品として書籍を持ち帰り、奇兵隊の蔵書としました。

白石正一郎の日記には、20箱を分捕って帰ると、記されています。具体的には、『和漢三才図会』（巻41・巻63）木版：1713年ころ発刊など。

※寺島良安著。日本最初の絵入り百科事典など。

「思永館」の所蔵印の上に、「奇兵隊」の所蔵印があります。これらの本は、現在、山口県立図書館、山口大学図書館などに約450冊が現存しています。

※下関出身の中国文学者：青木正児（昭和39年に75歳で没）（京都大学—山口大学 一立命館）が「随筆・琴菓書画」で、奇兵隊の戦利品と奇兵隊の読書欲を述べています。

「あの時世、軍隊が図書室を持っていて、それを充実するために、小倉藩学の蔵書を持ち帰ったのは、称賛に値する文化事業であった。維新の際、奇兵隊が示した読書欲はたいしたもの」と記しています。

## ●高杉晋作、名残のひととき

慶応3年（1867）4月14日、高杉晋作は、下関で結核のため病死しました。

“大不幸中の一幸”（親より先に死ぬのは、大きな不孝であるが、長男を残したのが、唯一の孝行、という意味）

“面白きこともなき世を面白く（東行） 住みなすものは心なりけり”（野村望東尼）。

NHKの「そのとき歴史が動いた」の番組で、もう一度聞きたい歴史上の人物の名言で、全国アンケートで第1位でした。

※日本三大銘菓「越乃雪」で、名残の雪見をしました。

高杉晋作は、病が重くなったとき、日本三大銘菓の一つ「越乃雪」を、松の盆栽にかけ、

名残の雪見をしました。(三浦梧郎が見舞いに行ったときに、話しました)

## ■高杉晋作の法灯を守る■

### ●墓標には「東行墓」

慶應3年(1867)4月14日、高杉晋作は、27歳8か月の生涯を閉じました。

葬儀は、16日、数千人が会葬し、吉田で神式により執り行われました。それは、白石正一郎などが一切を取り仕切ったことによります。墓は遺言により、吉田清水山に祭られ、高杉晋作の号から「東行墓」とのみ刻まれ、「史跡」に指定されています。

### ■戊辰戦争から維新実現■

海峡での戦いから、鳥羽伏見の戦い、さらに北越の戦いへと発展し、函館へと戦いは続き、日本人同士が戦い、多くの犠牲者を出しました。しかし、外国から踏み荒らされることなく、維新を実現しました。維新胎動の地は関門海峡です。



白石正一郎旧宅跡：奇兵隊創設の地



桜山神社



高杉晋作：功山寺拳兵の像



高杉東行（晋作）終焉の地



高杉東行（晋作）墓

## 5、＜明治維新を裏から支えた：白石正一郎＞

白石正一郎は、文化9年（1812）に生まれ、幕末、明治維新の実現を裏から支えた人物として、よく知られています。白石家は、小倉から下関に移り住み、酒造権をもっていたほか、諸国の廻船を相手に問屋業を営み、さらに、清末藩の大年寄りも勤めていました。父・資陽、母・艶子とともに歌人であり、学問の家でもありました。本人も歌集「松のおち葉」を残し、800余首の歌が収録されています。日記「白石家文書」（日記）は、下関市指定文化財です。

### 鈴木重胤の門人となり国学に心酔

安政元（1854）年8月、宗像神社からの帰途立ち寄った国学の大家、鈴木重胤の思想に心酔し入門。その心酔ぶりは、家の先祖を仏式から神道で祭ることに変えるほどでした。

同門人に薩摩藩士、工藤左門がいて彼との親交から西郷隆盛が白石邸を訪れるようになり、薩摩の藍玉を買い入れる交易のルートをつくることができました。これを萩藩に届けると、又末家の清末藩であるところから許されず、その権益は萩藩の御用達中野半左衛門のものとなりました。

白石正一郎は、当時の身分、士農工商の最下位の商人であったこと、清末藩という萩藩の又末家に属していたという、身分の不公平さに矛盾を感じ、社会制度の改革を夢に描いていたと思われまます。

### 豪商を示す伊勢参宮

#### ●伊勢参宮へ（安政3年＜1856＞6月～8月）

伊勢参宮は、45歳のとき。幕末の動乱が始まる前、夫人と使用人の3人での旅でした。

5月13日：伊勢参宮の計画をたて、大歳神社に＜御神気善悪伺ひ奉り頼置く＞

16日：大歳神社へ結果を伺うと＜旅行至ってよろしく思い立ち候様との御事につき、喜び罷帰候＞

26日：清末藩の許可を得るために、清末まで船でゆき、願書を出して旅館に宿泊。

27日：ご在番へ願書を出す。近日中に許可がありそうだから、用意をするようにとのことで、喜んで、外浦（長府）から船を借り帰る。

- 6月 1日：旅への支度を始める。  
 8日：九州から帰る伊勢内宮の社人が立ちより、打合わせする。  
 10日：＜諸所より餞別金銭、魚など呉候、＞  
 ＜朝よりませくる、夜ニ入乗船いたす、其夜神社下タニ係船＞  
 11日：朝上陸して、亀山八幡宮へ参拝。のち乗船し、阿弥陀寺の浜へ着く。お金を船頭へ預ける「30両」。  
 ＜夜ニ入り、家より母君・庫之進・富野母君など船中へ来訪。酒宴いたし無程各帰候＞  
 12日：＜昼八ツ時出帆、追風よろしく夜通し走る、夜明け前、上の関を過る＞  
 13日：岩国で下船、錦帯橋を見物。＜乗船中鯛二尾買い求め及酒宴＞  
 14日：宮島へ着く。厳島神宮参拝、紅葉谷などへも行き、茶屋で酒と食事。乗船し、音戸瀬戸を通る。＜船中乗り合わせ算用ス＞。(25、6年前見た時より繁昌とある。正一郎の伊勢参拝は2度目、夫人は初めての旅)  
 19日：舞子の浜。＜一の谷名物蕎麦切り甚わろし＞須磨寺などに参詣。＜敦盛卿御石碑というあり。平相国の御石塔へまいる。＞  
 20日：＜生田大神宮にまいる。境内に神功皇后の御釣竿の竹という小キ藪あり＞西の宮に着く。乗船し、尼崎に着く。  
 21日：大阪に着く。尼太というところが宿。  
 25日：大阪を出発。陸路で。＜住吉四所ノ大神へ参る、至って大社結構也＞福町着、宿泊。

- 7月 1日：松坂を経て、三井本家などがあつた。高向辻太夫へ着。至って取り持ち丁寧。  
 2日：外宮へお供え料を預ける＜タバコ二玉・硯石文鎮等土産トシテ出す＞  
 3日：外宮へ参詣。高向家が案内。夕方、孫福館太夫方へ移る。＜献供料共ニ金壹両献上ス＞  
 4日：＜今朝沐浴して内宮へ参詣、別して有り難き御事度も成り、筆紙に言い難し、奉献之分トシテ神馬壹匹孫福より引ゆく、礼拝のとき、祝詞御申し上有之、長州豊浦郡赤間関竹崎浦白石正一郎藤原資興同妻もと女献供云々、神馬云々と両度御申し上げ有之＞＜孫福氏ハ至って篤実温厚ノ人物にて損得にかかわり無之、宮より帰り直様西瓜出申候＞  
 5日：二見浦へ行く。＜この山より駿州の富士山ミゆるよしニ承得共、晴天ならでハミえず。今日雨天故ニ殺風景也＞宿屋に泊る。  
 8日：伊勢を出発、京都へ。＜松坂入口天満宮へ参る。本居大人碑銘あり。本居翁の墓へ参る＞六軒という所へ泊る。  
 12日：石山寺へ参詣。三井寺などを経て京都、豊後や友七という宿へ入る。  
 13日：大阪の「綿や長兵衛」へ預けた20両を、使用人由五郎に取りに行かせる。宿賃を長期滞留ということで、値切る。

※ 8月8日、出発まで、京都に滞在。一人で、また夫人と京都見物す。  
 ※ 智恩院・東寺・大徳寺・金閣寺・東福寺など  
 ※ ＜島原は二三年前出火にて焼亡後につき、至って不景気也＞  
 ※ 主な買い物は、夫人へ西陣織（2両）など・本人は辞典（3両）  
 ※ 大阪の商人へ売っていた蠟の代金の内20両を、使用人由五郎に取りに行かせる。

- 8月 5日：＜今朝大工呼ニ遣わし、呉服もの入れ候箱調べさせ申し候＞  
 8日：京都出発。嵐山經由、桂ノさと宿泊。  
 9日：高槻城の近くで宿泊。  
 10日：大阪の尼太という宿、伊勢へ行く時宿泊した宿。  
 ※ 17日まで滞在し、道頓堀・心齋橋など見物、買い物。  
 18日：夜になって出船。  
 24日：下関に着く。＜船中乗組みの者と別盃して、直様荷物手回り之分積み込

み、小船にて阿ミだじより帰る。夕方着>

25日：使用人から、帰着を在番へ報告。一二両社へ参詣さす。

26日：近辺へみやげもの配る。

※ 9月2日、清末へ行き、役人へお礼に行き帰着。

※ 9月3日、大年宮へ参詣。

伊勢参宮は、下級神職の御師（おんし）太夫が、宿泊などの斡旋をし、自分の経営する旅館に宿泊させ、参拝を容易にしました。現在の旅行斡旋業。

客を集めるために、全国をまわって、御札を配り、伊勢暦を売って収入としていました。伊勢暦は、農作業には便利で、重宝されていました。

### ●豪商としての取引

万延2（1860）年12月2日付けの日記に、

「大里船三隻にて廉作かえり来る、……金二万四千五百両を持ちかへる…」

と、記述されています。

船3隻に千両箱24個を積み、持ち帰ったのでしょう。2万4500両は、どんなに低く現在のお金に換算しても、10億円を下回ることはないと思われることから、豪商ぶりがうかがわれるというものです。

### ●動乱の中で高杉晋作と出会う

文久3（1863）年5月10日、幕府が攘夷決行を命じ、関門海峡では、五次にわたって外国艦船を攻撃しますが、四次・五次では、長州は敗北の憂き目に遭います。五次のフランス軍は、2隻の軍艦で報復に来襲し、前田に上陸後人家を焼き払い占拠しました。そこで、登場するのが高杉晋作です。

白石正一郎と高杉晋作のはじめての出会い、日記によると、文久3年4月27日で、

「久坂義助・高杉晋作を始め三十人、赤間関光明寺へ出張二付、諸世話方 相勤」

と記されています。

そして、高杉晋作が白石邸をはじめて訪れたのが、同6月6日で、

「今夜及深更高杉晋作君出関、此方へ止宿」

6月8日には、

「高杉君当家にて奇兵隊取立相成候、正一郎・廉作・庫之進入隊」

とあり、10日には

「今日迄ニテ奇兵隊七拾余人に相成、正一郎自宅ヲ以て隊ノ本陣トナシ、…

…其賄等皆自費にて相弁候」

と記述されています。

このように、白石正一郎邸で奇兵隊が結成されると、商人の正一郎はじめ弟たちもすぐに入隊しています。武士でない者の入隊を認めた、有志の隊が生れたことが、維新への出発点であったのです。そして正一郎は経費の負担をはじめていることがわかります。以後、豪商白石家の全財産を傾注することになりました。

この時、高杉晋作24歳、白石正一郎52歳で、親子ほどの隔りがありましたが、白石正一郎は若い晋作の、改革のために立ちあがろうとする熱意に、賛同したものとされます。士農工商の身分制度に矛盾を感じていた白石正一郎にとって、その改革のためならば、これまでの蓄財を投げ打つに値すると判断したと思われる。

### ●招魂場の開設に賛同

高杉晋作は、維新の英傑として、奇兵隊の創設（武士に限らず有志の者で編成）・四国連合艦隊との講和会議での対応（賠償金300万ドルを幕府の支払に）・長府功山寺での挙兵

(回天義挙)などが偉業として、称えられますが、今一つ「招魂場」の開設をあげることができます。

奇兵隊を創設し、それに賛同して入隊したことによって、自分よりも早く命を落とすことになった隊士を、なんとしても弔いたいと、招魂場を開設しました。この考え方の根底には、白石正一郎の助言があったものと思われま

す。慶応元(1865)年8月6日、招魂場ではじめての大祭を行っています。

「…鎧下垂着用総管にかわりて献供す これ神事奉行の役なり…」

と記し、神事の主役を勤めています。このとき、鎧下垂は、高杉晋作のものを借りています。

高杉晋作は、自分の置かれた立場を、

弔むらわ入るべき身なりしに 弔むらう人となるそはつかし

と、先立たれた隊員に対し、申し訳のない心のうちを詠んでいます。

この招魂場は、全国ではじめてできたもので、以後各地にでき、靖国神社もその精神を継いだものです。

創建当時は、奇兵隊士を祭っていましたが、のち報国隊や諸隊の隊士も加え、現在、396柱が祭られ、昭和23年から桜山神社と称しています。

### ●高杉晋作の死と共に活動を細める

白石正一郎邸には、中山忠光をはじめ三条実美など公卿のほか、400人を数える武士が出入りし、世話になっています。しかし、高杉晋作が、慶応3(1867)年4月14日、死去するとともに、白石正一郎の活動は細くなって行きます。それは、高杉晋作との絆の大きさを物語っている、ともいえま

しょう。明治新政府が成立すると、長州人は東京へと転出し、高位・高官へと就任してゆきましたが、白石正一郎は、維新実現のために、物心両面から絶大な貢献をしながら、いっさいの名利・恩賞を追い、散財後、つつましく暮らしをしていました。

わずかに喜びとすることは、明治5(1872)年6月12日、明治天皇が六連島灯台へ行幸され、西郷隆盛が案内をしています。このとき、白石正一郎は久々の西郷隆盛との出会いを、喜んだことでしょう。

明治天皇の行在所は、白石邸といったん決まっていたようですが、伊藤家と変更になりました。しかし、正一郎は伊藤家に赴き世話人を勤めています。西郷との関係がそうさせたものなのでしょう。変更の理由は、白石正一郎が商人であったことからと、推察することができます。

その後、明治10年からは、赤間宮の三代目宮司を勤めています(初代宮司・宍道恒樹、二代笠原頼十郎)。これも、奇兵隊の本陣が、白石邸が手狭となったとき、移ったのが赤間宮でしたから、やはり由縁のある神社で、正一郎にしてみれば、なつかしい日々を思い出すに好都合の場所でもあったことでしょう。

そして、明治13年8月22日、

「くもり日より、今朝津田御帰り、秀尾帰る」

と、記したのが日記の最後となり、同31日に亡くなっています。享年69歳でした。

大歳神社の鳥居に「文久二年 白石正一郎越智資興建」

赤間神宮下、海岸側の石灯籠には「明治十三年 白石資風」と刻まれていて、わずかに赤間神宮との関わりをとどめています。(墓所は中央霊園：奥津城は紅石山)

その後、白石正一郎の子孫は、神戸・東京に在住されましたが、平成11年の春から、白石資朗さんが弁護士事務所を下関に開設。12年の秋には御結婚され、下関人として活躍されていますことは、白石正一郎を敬愛するものにとって、このうえない喜びとなっています。

## 6、＜奇兵隊のふるさと吉田＞

奇兵隊が吉田にいた期間は、慶応元年（1865）4月～明治元年（1868）11月の解散まで。約3年半です。

### ● 「吉田」の地名は

上古は、吉井村と称していました。のちに、和名抄に「良田郷」とあり、地味の豊かな「よい田」、に由来しています。

※和名抄（わみょうしょう）は、和名類聚抄の略称で、平安時代のなかごろ、西暦900年代にできた、辞書です。

また、吉田権守貞恒という人がいて、この地を領有していたことから、吉田と称しました。貞恒という地名、貞恒川も吉田の中にあります。

### ● 宿場街

吉田重房という人が、享和2年（1803）ころ、「吉田の宿に至る、この所に萩街道と上方街道との追分あり、人家二百軒ばかり、多くは茅屋なり、茶屋、宿屋あり、船にて渡る川向は肥田村にて茶屋三軒路傍に並立てり、次に小屋村家居二十軒ばかりあり…」と、当時の様子を記しています。

吉田宿（駅）、人足58、馬15匹。の場所は、吉田小学校のすぐ西に、位置していました。山陽道は、木屋川を、秋から冬にかけて木橋で、春から夏は船で渡っていました。船は15隻、木屋川口に上荷船14隻、定渡船1隻。ともあります。

### ● 吉田宰判勘場あと。

県内に18の宰判があり、場所がはっきりしているのは、吉田のみです。

地方支配区分の名前を、「宰判」と称し、代官の支配地。美祢郡の南西部、厚狭郡西部の村を区域とし、勘場を吉田に置いていました。役人は、下代（勘定役）、筆者役・寺社方・山方・普請方・紙見取方・天下御物送り場番所・木屋川口番所・下津川口番所・埴生浦番所・吉田御茶屋番などがいて、勘場役人として大庄屋・同加勢・同暫役・算用師・御恵方・勘場守などがいました。代官は元和年間（1620年前後ころ）、山内土佐が任命され明治3年までに、95名が任命されました。明治11年12月まで所在しました。

建物は、2間梁、長さ25間半。その他倉庫。湯殿。納屋1棟がありました。練塀の長さ15間、門が一つ。東及び南に庭園がありました。

※高杉晋作の先祖：高杉小左衛門は、天明6年（1786）7月3日～11月17日まで、吉田御代官を勤めていました。

### ● お茶屋（本陣）

徳川時代諸侯が江戸参勤の途中、吉田駅止宿の際宿泊したところでした。勘場に続いていました。

本門の東側に2間四方のお茶屋番屋敷があり、常に番人が守衛していました。

本門の西側に長さ4間幅3間の家があり、大名が宿泊の際は、籠を据え、賄いの準備をしました。

正面には、釣敷台を設け、大広間、二の間、三の間、次に大小名の宿泊室の御座の間がありました。そのほか、左右に数室あり、幅1間の廊下が御座の間まで通じていて、湯殿、御化粧場はこの1棟の中にもありました。

家は茅葺で、間口16間、奥行き12間。東側に庭園がありました。

九州の大名で、宿泊した主なものは、小笠原、黒田、鍋島、細川、島津の諸侯で、大小

名宿泊のときは、宿割り役人が伴行列を各戸に割り当て分宿させました。  
御茶屋御本陣の亭主役は麻上下着用で駅端まで出迎え、ご案内をして本陣に着く。御籠は数百の武士に護衛されて本陣に着くと、本門を通過して沓脱石の上に駕を据え、大名は御座の間に入りました。  
出発の時は、お茶屋役人は麻上下着用で駅端まで見送り、役目が終わるとため息をしたといわれています。

## ● 多くの寺院（吉田内）

### ・蓮台寺

下関市指定有形文化財第1号「木造十一面観世音菩薩」を収蔵しています。  
寺の縁起によると、花山天皇（かざんてんのう：984～986年在位）の時世に、筑紫国（福岡県）へ派遣された勅使が海上で遭難しかけたとき、山から光輪が輝き、無事に船を誘導できました。そのお礼として天皇は寺堂を建立し、自ら十一面観世音菩薩像を造り安置した、とあります。像高91センチ、クスノキ材の一本造り。  
蓮台寺峠から、「哲学の道」という、石貼りの散歩道が続いています。  
※境内にハガキの木、正式には多羅葉（タラヨウ）（下関市保存樹指定）の木があり、葉っぱに、硬いもので文字を書き、切手を貼って郵送できます。

### ・常関寺

寛永5年（1628）領主、山内大隅守広通が建立し、のち電光院と称しましたが、万治元年（1658）に、常関寺と改め、享保15年（1720）に、山号を名月山としています。  
境内には、山内家の墓碑や、享保17年（1722）の豪雨とイナゴの大発生による飢饉で餓死した者への追善供養のため、十六羅漢が祭られています。  
また、慶應2年（1866）、小倉藩との幕長戦争を前に、奇兵隊の野戦病院が必要となり、山口、周東高森、吉田の3カ所に、置かれることになりました。吉田では、常関寺に置かれ、小倉戦争で負傷した隊士が収容され、境内には、堀滝太郎など奇兵隊士6名の墓碑があります。

### ・法専寺

吉田の領主、山内家の菩提寺で、浄土宗。慶應元年（1865）4月、吉田に陣を構えた奇兵隊は、法専寺を屯所の一つとし、吉田の街全体を要塞化していました。法専寺は、南側の砦として、位置づけられていました。  
隊士たちは、この裏山で、イノシシ狩りをしたそうで、境内には、奇兵隊士が、首の試し切りをしたという石造の六地藏、奇兵隊士・阿川四郎など7名の墓標があります。また、泥棒をして処刑された阿武市之丞の墓もあり、さらに、享保17年（1732）の飢饉で、餓死した人の慰霊碑もあります。

### ・長慶寺

奇兵隊の屯所の一つ。浄土真宗の寺で、街のなかにあります。元治元年（1864）7月、この寺の玉雲という僧が、「禁門の変」に参加し、戦死しています。奇兵隊の第1、2銃隊が屯所としていたことから、約50人もの隊士がいたことになり、また、奇兵隊の学校や病院施設としても使われていたようです。

## ● 庄屋・末富虎次郎家

奇兵隊が吉田に屯所を置いたとき、本営（会議所）としていました。末富家は、米や木炭の供給などで、奇兵隊の活動を裏から支えていました。  
高杉晋作の葬儀は、この家から出しています。山縣有朋は、結婚するまでこの家の二階



の一室を借りていました。梅処尼もお世話になっていました。

末富家の貴重な文書(本陣の配置図など)は、下関市立東行記念館に寄託されています。配置図からジオラマも作られています。

## ● 奇兵隊本陣(陣屋)

・奇兵隊はいつから吉田へ

奇兵隊の創立は、文久3年(1863)6月7日、高杉晋作が白石正一郎宅で創設しました。

吉田松陰の遺言「留魂録」に「天下の事を成すは、有志の士の志を通ぜざるは得ず…」とあり、志を同じくする人が集まらなければ、事をなすことはできない、と遺言しています。

高杉晋作は、この遺言に基づき武士としての石高や士農工商という身分に関係なく、志を同じくする人が集まってこそ、力になるとしました。

・吉田に来るまで

元治元年(1864)12月15日、長府功山寺で、五卿を前にして挙兵ののち、新地会所を襲撃、次の年には、大田絵堂の戦いで勝利し、藩論を討幕に統一しました。

『奇兵隊日記』の慶應元年(1865)3月27日には、

「一昨日吉田より山縣、湯浅(祥之助)、大石(雄太郎)3氏来る。吉田屯所確定を報ぜり」

とあります。この3人が現地調査を行い、これによって、吉田が転陣先になったことがわかります。

こうして、4月8日のところに、「吉田へ引越の義、いよいよ来る10日に相決候由也」とあり、4月10日に吉田へ移って来ています。

では、吉田のどこを陣屋としたのでしょうか。奇兵隊日記の中には、宗蓮寺・吉田宰判勘場・お茶屋・法専寺・松林寺・長慶寺の他に、庄屋末富家が本営と会議所に定められています。宗蓮寺・吉田宰判勘場・お茶屋は、すでに存在しませんが、その他は存在しています。宗蓮寺は東行庵の池の西側(堂之尾)で、吉田宰判勘場・お茶屋は、小学校の西に位置していました。

このほか、常閑寺は、戦争でケガをした隊士の医療、病院が置かれていました。

吉田の地は、萩本藩の所領地で、本藩に属していた奇兵隊にとっては、ふさわしい場所でありました。

慶応2年、8月1日、幕長戦争で小倉城は、長州藩に焼かれるより、自ら火をつけ焼失しました。これにより、長州藩は勝利しましたが、直ぐに海峡を渡って帰還することなく、小倉南区などで、小競り合いが続き、正式に和平交渉が行われたのは、慶応3年1月23日のことでした。その後も占領状態が続き、奇兵隊は小倉領内に残っていました。

ところが、『防長回天史』の慶應3年3月25日、「豊前駐在の奇兵隊諸兵に各銀30目を賜いその長陣の労を慰す」とあり、「27日奇兵隊正名団足立本営を發し海を渡り馬関において招魂祭に参加し操練を行い、翌28日吉田の旧陣営に入る」とあります。

『奇兵隊日記』には「27日朝五時半時、各隊一同足立陣営を發、九時前竹崎へ着船」「28日光明寺前に相揃…午時清末に到昼認、夕刻吉田へ着す」と記されています。

※足立陣営は、小倉の東、足立山の麓の広寿山のことで、福聚寺(黄檗宗)があります。

吉田へ帰陣のときは、旧陣営で、本陣は出来ていなくて、本陣への移転は8月13日でした。

山縣有朋から木戸孝允にあてた書簡があり、「…陣屋も急によし田へ転陣に相決り…」とあり、吉田への転陣が決まったことが、報じられています。

『奇兵隊日記』の慶應3年8月11日のところに「来る13日新陣屋へ転移に付き隊

割その他規則などに至るまで一統へ布告候…」と予告が記されています。

8月13日の項には「規則」とあり「隊中一和学校の心得を以って、文武の修業なすべく肝要、同志の信義を忘れ悪に従い腹誹し、徒党ケ間布儀は武門之可羞事に候」とあります。

また、「揭示」には

一毎月五十之日稽古止事

一毎朝六ツ時起鼓を發し盥漱洒掃、五ツ時集鼓にて舍外へ整列押陣、練兵場に至り九ツ時まで調練

一夜六ツ時より至五ツ時書見

一同四ツ時寢鼓滅燈、已後屹度可有整肅事

一毎朝起鼓にて講堂出席、読書至五ツ時

400人くらいの隊士は、毎朝6時に朝食、その後、2時間講堂で漢学、9時から洋式訓練など、昼食後は2時から随時外出でしたが、隔日、5人1組で吉田地区内の散策のみ、という厳しいものでした。窃盗や住民に迷惑をかける者に対しては、厳しく処罰が科されました。そのため、規律が乱れることはありませんでした。

陣屋には、調練の場や倉庫など多くの建物があり、敷地の広さは、300メートルと100メートルの長方形でした。

## ● 奇兵隊調練場

本陣は、以上のように、宿泊の場、読書の場などでありましたが、戦場での実践訓練の場は、調練場と称し、別の場所でした。

本陣から約500m離れた、現在の吉田大橋の上流、橋のたもと、ともいえる地で、「錦町鳩ケ尾」と呼ばれる地。田んぼが広がり、木屋川の堤防が連なっています。

奇兵隊日記によると、慶應元年（1865）4月10日に吉田に移ってきて、6月に入り、2日ばかりで開墾され、翌日から訓練が開始されたということです。このころは、まだ寺院を宿舎にしていたころにあたり、それぞれから集合していたことになります。

しかし、隊士たちは、新式銃を手にし、朝9時から訓練を重ね、幕府軍との決戦に備え、次の年には、小倉戦争（幕長戦争）へと出発しています。

### <吉田を出発：戊辰戦争へ>

明治元年（1868）3月17日

「一同用意を成シ四ツ時頃吉田陣營を發シ、行軍規則之通り清末・長府を経八ツ時馬関へ着陣、極楽寺・阿弥陀寺・にて暫休息、七ツ半時より薄暮に至り不残華陽艦へ乗組相濟」

※朝10時ころ出発し、午後2時ころ馬関（現在の下関）に着き、午後5時ころ乗船したことがわかります。

※したがって、吉田奇兵隊本陣には、約7か月の在陣で、いよいよ倒幕への戦いが始まることになります。

※瀬戸内海を船で、さらに京都まで淀川を船で上り、鳥羽伏見の戦いに勝利し、次は陸路で福井、富山を経て新潟へ着き、会津などでの戦いを経て、戊辰戦争が終結。奇兵隊が帰着するのは、明治2年（1869年）11月のことで、吉田に本陣の存在は、約2年半ということになります。

※鳥羽伏見の戦いの慰霊祭は、現在も京都で行われています。（退耕庵）

※会津では、「埋葬禁止令があった。とされましたが、実際は埋葬されていた」（野口信一著「会津戊辰戦死者埋葬の虚と実」）に詳しく記述されています。

## ● 戦利品の本

『白石正一郎日記』の慶應2年（1866）8月8日の項に「過二日小倉渡海の節書

物二十箱程軸物五ふく分捕致候…」とあり、戦利品として本と、軸物を持ち帰ってことが記されています。これらの本は歴史書や当時の百科事典などです。

いよいよ奇兵隊が、戊辰戦争へ出発するのは、明治元年（1868）のことで、小倉の藩校：思永館からの戦利品である本も整理される運命にありました。どのように整理されたかの一端をうかがうことは次によって知ることができます。

※田布施出身の奇兵隊士：長生静夫が、奇兵隊蔵書印の本を、買ったことを記しています。それは、次のことで確認できます。

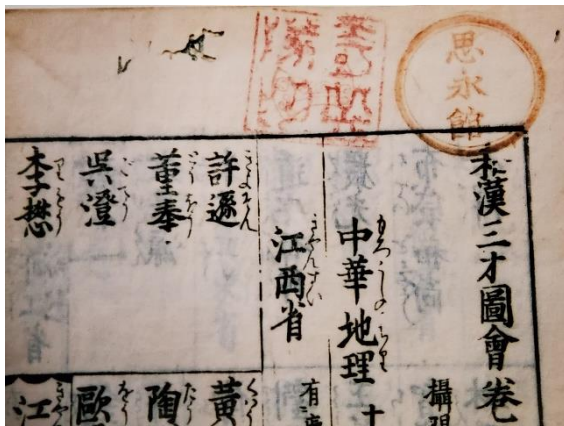
石田梅岩著『都鄙（とひ）問答』天文4年（1739）出版（長生俊良氏所蔵）。この本には、「思永館」印と「奇兵隊印」が押ししてあり、裏見返しに「此書慶應丙寅（1866）、豊前小倉落城之節奇兵隊小荷駄方為命取之明治戊辰（1868）於吉田陣買得者也 思永館者小倉公学校 長生氏」と記していることからわかります。

明治になって、吉田の奇兵隊本陣で、所蔵本を求める人に売ったことが分かります。

長生静夫は、奇兵隊小隊長で、伏見の戦い、会津・函館と転戦。熊本士官学校で病気となり、郷里で、商業を営んでいた人です。（明治27年没）

※旧小倉藩校を継承する福岡県立育徳館高校（みやこ町豊津）の小笠原文庫には、「思永館」本が30点ほど収蔵。同校の講堂は「思永館」と称され名前が残っている。

※戦利品として持ち帰った本は、山口県立図書館と、山口大学の図書館に「思永館本」約400冊が蔵書されています。東行庵には、10冊ほど。



(思永館本)



(思永館：みやこ町)

※青木正児（下関市出身の中国文学者）は、著書『琴慕書画』（きんきしょが）のなか

で、奇兵隊という軍隊が、吉田の本陣に図書室を設けていたのは、称賛に値する文化事業である。と記しています。

## ●東行庵

東行庵は、明治14年（1881）、曹洞宗総本山永平寺管長久我環溪禅師が、長府功山寺に来られたとき、得度を受けた”梅処尼”が初代で、ご本尊は、同禅師から賜った白衣（びやくえ）観世音菩薩。”

梅処尼”は、高杉晋作が下関に登場して以来、ともに暮らした“おうの”のことで、吉田の庄屋末富虎次郎の日記には、慶応3年5月14日の項に、すでに尼となったことが記されています。

また、”梅処尼”が、いつから吉田で生活を始めたかは、定かではありませんが、明治7年に、山県有朋が住んでいた無隣庵（むりんあん）の土地・建物を、梅処尼に寄贈しています。そのことから、これより以前と思われる。明治2年、山縣有朋がヨーロッパへ行く前、6月に、無隣庵をおうのに譲っています。

以来、初代庵主梅処尼、二代庵主梅仙尼、三代庵主玉仙尼、と引き継がれ、現在は有福孝岳兼務住職によって、高杉晋作をはじめ奇兵隊など隊士の菩提を弔う法灯が、受け継がれ守られています。

東行庵の建物は、明治17年に建立され、建築資金は、総額1550円の寄付金でまかなわれました。

毛利公の55円を筆頭に、50円は、山県有朋、井上馨、山田顕義、伊藤博文、杉孫七郎、西郷従道、黒田清隆、豊浦毛利。30円は、三条実美、品川弥二郎ほか9人など、143口が名簿に記されています。

また、昭和41年には、高杉晋作百年祭・記念事業として、当時の三代目庵主谷玉仙尼の努力によって、「東行記念館」が併設され、高杉晋作の遺品、遺墨をはじめ、明治維新に関する資料が保存展示され、その内容・規模ともに、全国でも屈指の施設として知られています。

特に三代目の谷玉仙庵主は、高杉晋作を顕彰することにこころがけ、百年祭の記念事業の催行ほか、偉大な業績から東行庵中興の祖と称えられ、令和3年10月1日には、33回忌を迎えます。